

『日本語の正体 倭の大王は百済語で話す』 金容雲 三五館、2009年

天理大学国際文化学部教授
松尾 勇 Isamu Matsuo

たいへん刺激的な書名である。百済は朝鮮古代の国である。4世紀前半に成立し、660年百済第31代の義慈王のときに新羅・唐の連合軍に滅ぼされた。その百済語で倭の大王が話していたというのである。紀元前に古朝鮮が滅亡したあと、紀元後朝鮮半島では三韓（馬韓・辰韓・弁韓）ならびに金官加耶（任那）の建国があり、続いて新羅・高句麗・百済の三国時代が到来する。日本列島と朝鮮半島の交流の歴史を考えれば、古代日本の国家形成に百済を出自に持つ人たちが重要な役割を果たしたことは間違いない。著者の「日韓語の変化過程」（175頁）によると、百済と新羅の言語は方言の差程度であり、日本列島で話されていた原日本語は8～9世紀にひらがな、カタカナが発明されるころ百済語に収斂する。そして、11世紀にはかな文学の隆盛期を迎える。いっぽう、朝鮮半島で話されていた原韓国語は同じころ新羅語に収斂する。同時にこのころから正統漢文を使用しはじめる。著者は日韓語のこのような転機を百済滅亡後の663年に起こった白村江（錦江）の戦いと見ている。そして、朝鮮固有の文字であるハングルは15世紀のなかごろ発明される。その後は時を経て現在のよう言語の姿になったという。壮大な歴史言語絵巻を見ているようである。

日韓両言語の類似性には他のどの言語も及ばない。ただし、その類似性は文法に限られる。音節構造は似ても似つかない。なぜか。著者は漢字の流入がその原因という。現在の韓国語の漢字音は新羅時代の唐音が元になっている。韓国語の音節構造は日本語に比べて、複雑である。現代語では音節末子音が7種類ある。正書法による音節末表記は27種類にもぼる。韓国にも日本の仮名に相当する文字創出の発想はあった。漢文を読むときに送り仮名のようにつける口訣というものがあつた。口訣は助詞や語尾といった文法要素を漢字の正字で書くが、カタカナのように漢字の一部を用いることも多々あつた。ただし、本文を訓読することはない。ハングルが創製される前に口訣文字の段階を踏んでいるのである。ハングルの字体は口訣文字の影響を受けたのではないかと考えられている。口訣文字は2001年に韓国で発見された角筆文献を分析することによって新羅時代にすでに用いられていたことが明らかになった。角筆とは材質が象牙、または、竹や木などで作った筆記用具をいう。仮名で表記するには韓国語の音節構造は複雑すぎた。朝鮮王朝第4代の世宗王を中心とするその研究者グループは、現代の言語学でいう音素分析を行った結果、ハングルという音素文字を作り上げたのである。

著者の金容雲氏は韓国の数学文化研究所所長を務めた著名な数学者である。同時に韓日文化交流会議委員長を務め、2002年に故金大中大統領が推し進めた日本文化の開放政策に大きな役割を果たされた、日韓文化比較論の専門家でもある。専門分野では東洋の数学の歴史と変遷の研究をされ、東洋数学が日中韓で独自の発展を遂げたことを明らかにされた。『数学序説』、『韓国数学史—伝統数学とその歴史—』、『人間学としての数学』

などの著書がある。さらに数学の歴史から各国の文化の違いに注目して、『日韓の宗教意識と天理教—崇りの神・恨みの神・救いの神—』、『日本人と韓国人の意識構造—歴史的体験と民族性の論理—』、『日韓民族の原型—同じ種から違った花が咲く—』、『韓国人と日本人』などの多くの著作を世に出されている。一時天理で研究されていたころ私も氏の講演を直接拝聴したことがある。たいへん興味深いお話であつた。特に、儒教の徳目である「忠」と「孝」の日韓両社会における優先順位にもとづく価値観の相違に関する指摘など、まさに「目からうろこ」が落ちた。

また、2007年12月に日本のNHKで放送された、日中韓文化交流フォーラム（2005年設立）主催による「グローバル化の中の東アジア～文化交流の視点から～」においてはご専門の数学をもとに東アジアを視野に入れた比較文化論を展開された。昨年亡くなられた画家の平山郁夫氏がフォーラムの日本側代表を務められ、中国からは元中国文化部次官で中国対外文化交流協会常務副会長の劉徳有氏らが出席された。その席で指摘された「個性を生かして明るい東アジア文化を形成する」という話は印象的であつた。そのことを実現するために必要なこととして、孔子の言葉「和して同ぜず」、新羅の僧である元曉大師の言葉「和諍」、中国の言葉「諍友」（劉徳有氏）が紹介された。「諍」には「①いさめる。いさめ直す。②うったえる。③あらそう。いさかう。言い争う」などの意味がある。耳の痛いことでも言い合える、何でも言い合える友になろうということであつた。

本書は金容雲氏のこれまでの研究をもとに言語研究にまでその幅をひろげ、日本語と韓国語に関して正面から取り上げた最初の著作である。著者は「言語の性格と国民性」という次の課題にすでに向き合っておられるようである。著者の構想を頁ごとに熟読玩味して読み進められることをお勧めしたい。本書を通じて、それぞれの文化の根源を学び理解する人たちの増えることを期待したい。

